こころは恋を知りました

カイセイ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋を知っちゃったこころと教えちゃった男の子のお話。

目　次

序　こころが恋を知った日 ―― 1
一　こころは心に決めました ―― 5
二　こころはバンドに決めました ―― 9
三　こころは花音を招待しました ―― 13
四　こころはかまって欲しいようです ―― 18
五　こころは手錠を使うようです ―― 22
六　こころは裁判をするようです ―― 27

序　こころが恋を知った日

小さなころからずっと、虎太郎はあたし、弦巻こころの隣にいた。
あたしの一歳の誕生日に弦巻家に引き取られた、一つ年下の男の子。
何をするにしても一緒で、それが当たり前なんだって思っていた。
だから、というわけじゃないけれど、あたしは虎太郎がいるといつも笑顔になれた。可愛い弟みたいな存在だった。
弦巻の家には黒い服を着た人がいる。あたしのことを世話したり、陰ながら守ってくれたりする頼れる人達。
小学校に入学したころ、彼らを眺める虎太郎の目が真剣なものに変わっていたことをあたしは知っている。
あたしには言わないようにしていたのだろうけれど、虎太郎が黒服になることを決意したのはきっとそのころからだ。
だからだろう。虎太郎は人一倍、いいえ、もっとずっと勉強も運動も努力した。
決して図抜けた才能があったわけではない彼だったけれど、三年生になるころには、学年で一番の成績をとっていたし、運動では誰よりも活躍していた。
自然と、あたしの目は虎太郎を追っていた。
いつも隣にいてくれる虎太郎がふと見えなくなるとどうしようもなく寂しくなった。それでいて彼の前ではお姉さんぶるのだから、なんだか笑える。
でもそれもあの日から変わった。
四年生になったころ、学校行事の遠足で、あたしは列から離れてはぐれてしまった。
あたしは楽しそうなことや面白そうなことを見つけると夢中になってしまう性格で、その時も気づいた時には草木の茂る薄暗い山中でひとりぼっちになっていた。
いつもならそんなときすぐに駆け付けてくれるはずの黒服の人たちも来てくれなくて、らしくなくあたしは抜け出したことを後悔しそ

うになっていた。
「こころが行こうとしてた場所、たぶんこっちだよ」
　汗で着ていたシャツをぐっしょりと濡らして茂みから出てきた虎太郎は、迷子になったあたしのことを心配するわけでも、怒るわけでもなく、普段通りあたしの隣に立って手を引いてくれた。
「虎太郎はどうしてあたしがここにいるってわかったのかしら？」
　すぐにいつもの調子を取り戻したあたしは、隣を歩く虎太郎に聞いてみた。
「山頂の綺麗な景色を見たら笑顔になれそうで、飛び出して、道に迷ったんだろうなーって……あってる？」
「すごいわ！　虎太郎！　正解よ！」
　すべて完璧に虎太郎に言い当てられて、あたしはとても驚いた。あたしの考えをわかってくれる人なんてめったにいない。
「正解よ！　じゃないでしょーが」
　優しく微笑みながら、虎太郎がわたしのおでこをピンとはじいたけれど、全然痛くなかった。
　それよりも、そのときの虎太郎の笑顔が頭の中に強く残った。
「あ……えっと……ごめんなさい……」
「珍しくしおらしい」
　とくんと跳ねる心臓の音は不思議と耳障りではなくて、むしろこの心地良い感覚に浸っていたいとさえ思えた。

「ついたよ。こころ」
　言われて、あたしは飛び出した。虎太郎の隣にいると顔が熱くなってしまって、何となく彼にはそれを知られたくなかった。

「見て！　虎太郎！　とーっても綺麗よ！」
「うん。そうだね」
　想像していたよりもずっと美しい風景に、思わずあたしは笑顔になった。
「虎太郎……またこんな風に笑顔になれるものを一緒に探してくれる

かしら？」
何気ない質問のつもりだったけれど、断られたらどうしようと後から段々不安になってくる。
今までこんなこと一度もなかったのに。
でも、そんなあたしの不安なんか吹き飛ばすように、虎太郎は笑顔で答えてくれた。
「当たり前でしょ……てゆーかなんでちょっと不安そうなのさ……変なこころ」
「そ、そうかしら？　……でも、ありがとう。虎太郎」
「……うん」
今でも鮮明に覚えている。あたしの大切な思い出だ。
＊　＊　＊
それから少し日がたって、無事家に帰って、それでもあたしは面と向かって虎太郎と話せないままでいた。
何故だかわからないけれど、虎太郎の目を見ただけで顔が熱くなってしまう。
どうにかして解決しようと黒服の人たちの相談しても、言葉を濁されて要領を得ない。
このままでは埒が明かないと考えたわたしは、思い切ってお父様にそれを聞いてみた。
あたしの話を聞いたお父様は、初めは嬉しいような寂しいようななんだか複雑な顔をしていた。
そして、少しの間を開けて、静かに微笑んだ。
結論から言うと、あたしの虎太郎に対するこの感情は「恋」と呼ぶらしい。お父様が教えてくれた。
あたしが虎太郎という男の子を友達として、ではなく、異性として好きになったということらしい。
お父様からそう言われて、恥ずかしかったけれど腑に落ちた。
「あたし、恋をしているのね」
仕事に戻ったお父様の部屋を出て、あたしはそっと自分の左胸に触れる。

心地良い鼓動は今もまだ続いていて、きっとこれから先も止まないだろう。
だけど、変わったこともある。
虎太郎に会いたいと思った。会って、目を見て話がしたいと思った。
こうしてはいられないと、あたしはすぐに駆け出した。
「虎太郎！」
「ん？　そんなに慌ててどうしたのさ」
「お勉強中だったかしら？　でもどうしても伝えたいことがあるの！」
「ほー。いってみ？」
真ん中に大きな机があるだけの簡素な部屋にいた虎太郎は、あたしの話を聞こうと持っていたペンを置く。
ほっとした。
自分の気持ちを知って吹っ切れたおかげで、虎太郎と普通に会話ができた。相変わらずいうことを聞いてくれないあたしの心臓は早鐘を打っているけれど。
「あたし、恋をしているわ！」
言った途端、まるで時が止まったかのように虎太郎は動かなくなる。目は開きっぱなしで、口もあんぐりと開いている。
少したって、今度はぶるぶると肩を震わせた。
「へ、へー。あ、あああいてはどこのどいつなのさ」
気になってくれていて、自分がその相手だとは少しも思っていなさそうな反応にこころは笑ってしまいそうになる。
「……ひみつよ！」
人差し指を口元に立てて、にぱっと笑う。
今はまだ伝える勇気がたりなかったけれど……いつかはきっと。
――あたしは恋を知りました。

一　こころは心に決めました

こころが恋をしている。それを知ってから六年の月日がたった。

僕、御守虎太郎（みもりこたろう）は中学三年生になり、こころは高校一年生になったから、学校に通っている間は会えないわけで、もどかしいというか心配というか、僕にとってはそんな時間が増えた。

もっとも、当のこころの浮いた話は聞かないし、流れてくるのは異空間と呼ばれているらしいこころのぶっ飛んだ所業の噂だけなので、今のところは僕の不安は杞憂に終わっている。

とはいえ、不安なものは不安だ。こころはとても心優しい女の子だから。

一見理解不能なことをしているように見えて、その実自分だけでなく、誰もが笑顔になれるようにと行動をしているのだ。

弦巻家の教育方針が良かったのか、生まれ持ったものなのかはともかく、お金持ちの家の我が儘お女王様というわけでは全然ない。

両親のいない、天涯孤独の身である僕が生まれてこの方寂しい思いをしたことがないのはこころがずっと一緒にいてくれたからだ。

それに、こころはとても可愛い女の子でもある。

入念に手入れされた艶やかな長い金髪に、吸い込まれそうなほど澄んだ金色の瞳。まるで作り物のような整った容姿で浮かべるあどけない笑顔は見ているこっちまで笑顔にしてくれる。

異空間と呼ばれるほどぶっ飛んだ言動をしている今でさえ、僕が思わず目潰ししたくなるほど、彼女に目を奪われている男の数は計り知れない。

いろいろ言ったけど、僕が最も気になっているのは相手は誰なのかということだ。

正直、最初は僕じゃないのかと期待した。

僕とこころは幼いころからずっと一緒にいるし、僕以外の男と関わる彼女の姿をほとんど見たことがなかったからだ。

だけど、それはないなとすぐに気づいた。

真っ直ぐで、考えたことをすぐ行動に移す性格のこころのことだ。

僕を好きなら、あの日告白してきたはずだ。
ずっとこころを見てきた僕だからこそ、そう理解できてしまった。
こころの隣にいられなくなったとき、僕は一体どうなってしまうのだろう。なんて、最近僕はふとしたときに考える。
「ふぅ」
図書館の一角、下校時刻はとうに過ぎて誰もいなくなった校舎で一人勉強をしていた僕は大きく息を吐く。集中力が切れてきたみたいだ。
ちらりと腕時計に目を向けると、時刻は午後五時。こころの通う高校の下校時刻を指していていて、そろそろ帰ろうと僕は机の上に転がっている文房具を片付けた。
＊＊＊
「虎太郎！」
「お、こころ」
校舎を抜けた先の校門の前、読んでいた単語帳をそっと閉じて声のした方を見ると、相変わらずのはじけるような笑顔でこころが右手をぶんぶん振っていた。
やはりこころの笑顔には、見ている方までつられて笑顔になってしまうような魅力がある。
「待たせちゃったかしら？」
「いや、全然」
そんなこころにどぎまぎしてしまって、僕はつい素っ気ない返事をしてしまう。そしてやってしまったと後悔するいつものパターン。
こころにはほかに意中の相手がいるとわかっていてこのざまだ。
黒服の仕事をするようになったら四六時中こころの安全を見張ってないといけないから、なんて超が付くほど適当な理由をこじつけてまでこころと一緒に帰っているというのに、これでは意味がないどころかマイナスだ。
「虎太郎！　見て！　桜がとーっても綺麗に咲いているわ！」
言われて周りを見てみると、歩道の脇に植えられた桜が鮮やかに咲いていた。

これを見て、進級したなーって気持ちになるのは僕だけじゃないと思う。
「うん。持って帰りたいぐらいだ」
「ダメよ虎太郎。それじゃあこれからここを通る人たちが笑顔になれなくなってしまうもの」
僕としては冗談のつもりだったけれど、こころは怒ってますと言わんばかりに頬をぷくっと膨らませる。
そんな仕草を見せたって可愛いだけなのに、こころとしては弟を叱る姉のように振舞っているつもりなのだろうから、僕は思わず笑ってしまいそうになる。
ほかの人には見せない僕だけが知っている彼女の一面。少しだけ、得した気分だ。
「やっぱり、こころは優しいや」
素直にそう言って笑いかけると、こころは何故か顔をそらしてうつむいてしまう。
心なしか、耳元が朱に染まっているようにも見えた。
もしかしたら、寒いのかもしれない。
冬が終わったとはいえ、時折肌寒く感じるし、季節の変わり目は風邪をひきやすい。
黒服を目指す人間として、これは見過ごせない。
特に何も言わずに制服の上着を脱いで、そっとこころの背にかける。
少しかっこつけすぎたかなと、自分でやったことが恥ずかしくなってきて僕は頬を掻いた。
「あ……えっと……ありがと……」
貸してあげた制服をぎゅっと握って呟いたこころを見るに、やはり寒かったんだろう。
それにしても、最近はしおらしいこころを見る回数が増えた気がする。
これでも学校では異空間だなんて呼ばれてるんだから、世の中わからない。

ぶっ飛んだ言動もするけど、女の子らしいところもたくさんある。理解者が増えてくれることを祈るばかりだ。
「やっぱりあたし、虎太郎といると笑顔になれるわ」
ふいに顔を上げたこころは、とびきりの笑顔を見せた。僕が大好きな、見ているこっちまで笑顔にしてくれる、世界一の笑顔。
だけど、ずっとこころといる僕にはわかる。いまこころは僕なんかじゃ思いもよらないようなことを思いついたんだって。そんなときに彼女が見せるキラキラした瞳が雄弁にそう語っていた。
「もしかして、何か思いついたりした？」
「やっぱり……虎太郎はあたしのことをわかってくれるのね」
静かに言ったこころの頬が薄っすらと朱くて、思わず僕は彼女に魅入ってしまう。
ぼーっとしてしまっている僕にも聞こえる、いつもの元気な声でこころは続けた。
「あたし、世界を笑顔にするわ！」
「……んあ？」
「聞こえなかったかしら？　じゃあもう一回言うわね！　あたし、世界を笑顔にするわ！」
ありきたりな返事しか思いつかなくて、僕は言葉を失った。
やっぱり僕とこころじゃスケールが違いすぎるなー、なんて、僕は己の凡庸さを呪うことしかできない。
だけど、それでも……。
「僕も手伝いたいなー、なんて……」
「もちろんよ！　虎太郎ならそう言ってくれるって信じてたわ！」
たとえ隣に立てなくても、僕はこころを支えられればいいのかもしれないと思った。まだ、それが僕にとって正解なのかはわからないけれど。
「んーーー！　こうしちゃいられないわ！　虎太郎！　さっそく家に帰って作戦会議よ！」
とたとたと駆け出してしまったこころの後を、僕はゆっくりと追いかけた。

二　こころはバンドに決めました

次の日、うっすらと星が見え始めた頃。
『やることができたわ』という連絡が来て、珍しく一人で先に弦巻家に帰っていた僕に、後から帰ってきたこころは玄関先で宣った。
「わたし、バンドを組むことにしたわ！」
普通ならば頭に疑問符が浮かぶ状況だろう。
けれど長年こころと一緒に育ってきた僕は違う。そう簡単にこころの発言に「は？」なんて言ったりしない。
こころと同じことを思いつくレベルまでは至らなくても、どういう経緯でその発言や言動に至ったかを理解できるのだ……五割くらい。
今回の発言は、昨日のこころの「世界を笑顔にするわ」という宣言と関係があるに違いない。
僕と二人で話し合った時には弦巻家の力をもってしても流石に実現不可能だろうものだったから僕がやんわりと断って、結局その日のうちにいいアイデアは出てこなかったんだけど。
「バンドで世界を笑顔に……ってことだよね？　おもしろそうだね」
「虎太郎もそう思うわよね！　今日はさっそく花音と二人でライブをして、とっても楽しかったもの！」
「……は？」
「見に来てくれた人たちもみんな笑顔になってくれたし、最高だったわ！」
「……」
僕は言葉を失った。あと「は？」って言っちゃった気がする。
いや、気にしないことにしよう。今のはノーカン。
それよりも、だ。
「聞きたいことがありすぎるんだけど……まず花音さんって誰さ」
「花音は花音よ？　ドラムができるわ」
「……なるほど」
今日のこころは興奮しているせいかいつもよりはちゃめちゃだ。
巻き込まれた花音さんって人が心配になる。

こころって割と強引なところがあるからな。最終的には何故かうまくいくことが多いし、その人も悪いようにはならないと思うけれど、僕みたいに巻き込まれ慣れてないだろうから少しだけ心配だ。
「じゃあ次は……二人でライブをしたって言っていたけど、どういうこと？　バンドってドラム以外にももっと人がいるとはずでしょ？　ギターとかベースとか……こころはボーカルだろうし……」
「虎太郎はバンドのことよく知ってるのね！　確かに、バンドにはギターとか、ベースとかを弾く人が必要みたいよ！　二人で演奏してあれだけ楽しかったんだから、人数が揃ったらもっともっと楽しくなるに違いないわ！」
「……なるほど」
あんまり会話がかみ合っていない気がする。まあとりあえず、今日は二人でライブをしたらしい。
こころのことだしきっと路上ライブだろうから悪目立ちしていなかったか心配だ。こころは可愛すぎて、何をするにしても目立ってしまうのだ。僕としては心配である。
「虎太郎は何か楽器はできるの？　やったことがなくても、新しいことに挑戦するのはきっと楽しいわ！」
「楽器も楽しそうだけど、僕は裏方の仕事がしたいかな」
目立つのはあまり好きじゃないし、僕のやりたいことはこころを支えてあげることだから。
「それなら虎太郎にはうらかたのお仕事をお願いするわね！　……ところで、うらかたのお仕事って何かしら？」
こてん、とこころは首をかしげる。あざといと思ってしまいそうになるけれど、彼女は素でこれをやるから末恐ろしい。将来が心配になる。
ほんの少しおバカなところもこころの魅力の一つだ。
「うーん、一言で説明するのは難しいな……簡単に言うと、バンドが上手く機能するように影でサポートする、みたいな感じかな？」
「バンドを助けてくれるのね！」
「うん。僕はそういうのが好きで、楽しいんだ」

楽しいという言葉にこころが笑顔で反応して見せる。
やはり彼女には説明じみた言葉よりも心の内をさらけ出した言葉のほうが性に合っているらしい。
「そう。虎太郎が楽しいなら、それが一番ね！」
金の瞳を煌めかせたこころがどうしようもないくらい可愛くって、僕は思わず彼女の金髪を撫でた。
ふわり、と柔らかな感触。手入れが行き届いていることがよくわかる。
「……ぁ……ぅ……こ、こたろー？」
「あ」
ゆでだこみたいに真っ赤になってうつむいてしまったこころを見て、僕ははっと正気に戻る。
嫌だっただろうか。怒らせてしまっただろうか。こころに限ってないとは思うけれど、これが原因で距離を取られでもしたら、僕はもう生きていけない。
「ご、ごめん！　こころ！」
「い、いいいいのよ！　気にしないで！」
悪い予感は当たってしまった。
シュバ、なんて擬音がぴったりなほどの速さでこころは僕の手が届かないくらいの位置に移動した。
気にしないでと言ってくれたものの、依然顔は紅潮したままで、ぐるぐると目を回している。いつものこころじゃないことは明らかだ。
「あ、そ、そろそろ寝る時間かしら？　明日はバンドのメンバー探しもあるし、早めに寝たほうがいいわよね！」
「……晩御飯は？」
帰ってくるのが遅かったとはいえ今はまだ六時。いくらなんでも寝るのは早すぎる。
「そ、そうね。忘れてしまっていたわ。それに、お風呂にも入っていないわ。虎太郎も一緒に入りましょう」
「へ？」
「あ」

徐々に薄れつつあった顔の赤さが、再び全盛期に戻る。
今のは自爆だ。
でも、僕のせいでこころが挙動不審になってしまっていることは間違いがない。
「あ……お、お風呂に入ってくるわ！」
そう言い残して、こころは部屋を出て行った。
今日はもう、こころに会うのは自重しよう。
幸い、家が広すぎて会わないでおこうとすれば出くわすことはなかなかない。
「なんであんなことしちゃったかなぁ」
他に好きな人がいるのに、僕に頭を撫でられてうれしいはずがない。
後悔先に立たずだ。今更何を言っても遅い。
反省した僕はそれからこころと顔を合わせることもなく、悶々として過ごした。
明日になって、忘れてくれているといいな。

三　こころは花音を招待しました

人差し指で床をこすると、キュッという子気味のいい音がして、僕は濡れ雑巾から手を放す。

弦巻邸は広いから、その掃除は黒服さんたちが数人がかりで協力して行っている。

将来は黒服さんたちの仲間入りをと志す僕も、職業体験にと手伝わさせてもらっているんだけれど、これがなかなか大変で骨が折れる。

まずは簡単なことからとやってみてこのざまだから、やっぱり黒服さんたちはすごいなっていう憧れと、僕もまだまだなっていう落胆が入り混じった複雑な感情になる。

まあ、いきなり上手くいくだろうなんて思っちゃいない。

幼いころからずっと、時間をかけて努力してきた。僕が非凡な人間じゃないことくらい自覚している。

「そろそろかなぁ」

壁に掛かった時計の短針が五を指していて、僕は一人呟いた。

今日も昨日に引き続き、僕は学校から一人で帰宅した。

昨日のいざこざが原因ではない。

そのことについては今朝こころが「なんのことかしら？」って言ってたから関係ないはずだ。こころが忘れっぽい子で助かった。若干棒読みだった気もするけれど、多分僕の気のせいだろう。

だったら、今こころは何をしているのかっていうと、正直全くわからない。

送られてきたメールには『今日も先に帰っていてちょうだい！』としか書かれていなかったし、こころの行動は読めないことで有名だ。

それにしても……落ち着かない。

僕とこころが中学と高校に分かれてそれなりに日がたつというのに、こころがいない時間にはなんだかそわそわしてしまう。

こころを見ているとはらはらするのに、同時に安心もする。

もしかすると、僕は変な奴なのかもしれない。

「ただいま―！」

うぐぐと唸る僕の耳に、聞きなれた元気な声が届いた。

＊＊＊

「ふぇぇ」

私、松原花音は最近嵐に巻き込まれている。

昨日は売るはずだったドラムで路上ライブをさせられ、今日はお城みたいな家に連れてこられた。

それもこれも、断り切れない意気地なしの私が悪いのだけれど……。

「さあ、行きましょう！　花音に会わせたい人がいるの！　バンドの手伝いをしてくれる人よ！」

太陽みたいな笑顔で、こころちゃんは私の手を引く。

高校では異空間だなんて呼ばれているけれど、底なしに明るくて行動力があって、私とは真逆で、私なら絶対無理だと言って投げ出すようなことを簡単にやってのける。すごい女の子。

昨日だって私に勇気をくれて、才能がないって諦めていた、やめるつもりだったドラムが少しだけ楽しいって思えた。

もしかしたら、こころちゃんなら私を変えてくれるかもって思った自分がいた。

でも……私にはまだ勇気が足りない。もう一度人前でドラムを叩けと言われて、上手くできる自信がない。

そんな私の悩みなんてつゆ知らず、こころちゃんはずんずん進んで、おうちのドアをがちゃりと開けた。

「虎太郎！　花音を連れてきたわ！」

玄関先で待っていたのは、虎太郎と呼ばれた男の子だった。

「ふぇぇ」

聞いてない。聞いてないよこころちゃん。その会わせたい人が男の子だなんて……。私ちゃんと話せる自信ないよぉ……。

「おかえり……こんにちは」

相手の男の子、虎太朗さんもこころちゃんから何も聞いていなかったのか、一瞬だけ驚いたように見えた。でも、すぐに落ち着いた表情で挨拶をしてくれた。

緊張しいな私と違って大人びてるなぁっていうのが彼の第一印象。
私より背も高いし、きっと私よりも年上だろうな。この家の人だろうし、こころちゃんのお兄さんとかかな？　それにしてはあんまり似てない気もする。
「こ、こんにちは……おじゃまします」
それに対して挨拶さえちゃんと返せない私……情けない。
「花音さんって、こころと二人でライブをしたって言ってたあの花音さんだよね？」
「その花音よ」
「……なるほど」
一人落ち込む私をよそに、こころちゃんと虎太郎さんは話を進める。
こころちゃん経由で私がライブをしたことが伝わっているみたいでかなり恥ずかしい。
変な人だって思われたかも……。
「……それで、今日はうちで何をするのさ」
「顔合わせよ！　バンドに入ってくれることになった花音を虎太郎に紹介しようと思ったの！」
「……花音さんはこころが強引に加入させたわけじゃないんだよね？」
「あたりまえじゃない！　ね！　花音！」
「ふぇぇ？」
思いがけない質問が飛んできて、私は動揺してしまう。
ちゃんと伝えなきゃいけないのに……確かに強引に誘われて、最初は嫌だったけれど、今はやれるかもって思ってますって。これじゃあこころちゃんが悪者だ。
「え……えと……」
二人の視線が突き刺さる。
こういうときにはっきり口に出せないのが私の良くないところだってずっと前からわかっているのに、私はちっとも進歩できない。
「私……こころちゃんとなら、変われるかもって……」

小さな、ほんの小さな声しか出なくて、こんな声じゃ誰にも聞こえるはずがない。
何も言えなかったら、はたから見たらやめたいって思ってるように見えてしまうのに……。そうじゃないのに……。
「……なるほど」
虎太郎さんが呟いた言葉は私には聞こえなかったけれど、その表情は喜んでいるように見えた。
「まあ、とりあえずやってみましょう。やってみたら、楽しいかもしれないですし」
虎太郎さんはさっきまでとは打って変わって、まるでこころちゃんみたいな強引さでそう言った。
にやりと笑うその笑顔も、こころちゃんを彷彿させて、太陽みたいに暖かい。私に勇気をくれる笑顔。
「私……やってみたいです！」
私を縛る鎖が解けて、声高に言った。
「ほら、言った通りでしょう？」
「絶対強引だったでしょ……」
得意げに言ったこころちゃんに、困り顔で言い換えす虎太郎さんを見て、私は思わず口が動いた。
「太陽が二つあるみたい……」
言い終えて、笑った。緊張はもう解けていた。
「やっぱり、花音は笑顔の天才ね！」
「……だねぇ」
こころちゃんと虎太郎さんも笑っていた。
この二人となら変われるって、そう思えた。
「ところで、虎太郎さんはこころちゃんのお兄さんなんですか？」
まず初めにと、思っていたことを口に出してみた。でも、これはいきなり地雷を踏んでしまったらしい。
こころちゃんは頬を風船みたいに膨らませて、虎太郎さんは苦笑いを浮かべている。
「どう見てもあたしの方がお姉さんじゃない！」

「そ、そうだね……」
どうみても逆だよ、こころちゃん……。
内心そう思ったけれど、私は口をつぐんだ。
＊＊＊
あれから、こころちゃんが拗ねてしまって、結局何もせずに私たちは解散した。
虎太郎さんから教えてもらったけれど、彼とこころちゃんは兄弟というわけではなく、わけあって小さいころから弦巻家で一緒に暮らしているらしい。
虎太郎さんは中学三年生で、だからこころちゃんは怒ってしまったみたいだ。
学校では見られないこころちゃんの可愛い一面を見られて、なんだかうれしい。
ベッドの上で一人悶えていると、携帯の通知が鳴った。
誰だろうと見てみると、画面に表示された名前は今日連絡先を交換したばかりの虎太郎さんで、すぐにロックを解除する。
『迷惑かけるかもしれませんが、こころのことよろしくお願いします。これからバンド頑張りましょう。
あと、僕は年下なのでさん付けしなくて大丈夫です』
絵文字のない、彼らしい真面目な文章に微笑みながら、メッセージアプリを開いて、友達リストに乗っている『虎太郎さん』を『虎太郎君』に変更した。
変わりたいって、変わろうって、心の底から思えた。
私は自分を表現したいんだ。
これからの想像に胸を膨らませながら、私は部屋の電気を消した。

四　こころはかまって欲しいようです

あたし、弦巻こころは常に楽しいことを探している。
どこにいたって、誰といたって、それは変わらない。
でも、毎回すぐに見つけられるわけじゃない。いつも楽しいことを探しているから、逆に見失ってしまうときもある。
「うーん。困ったわね……」
今はまさにそんな状況。
昼休みには校舎を駆け回って屋上に上ってみたり、校門の上に立ってみたりしたけれど、得られたのは先生の怒鳴り声だけ。
花音にも会えなかったし、今日はあたしにしては珍しくあまり調子が出ない日らしい。
悩んでいるうちに、終業を知らせるチャイムが鳴った。
先生も生徒たちもいつの間にか退室していて、残ったのはあたし一人。
こんな日の打開策は一つしかない。
あたしはバッと教室を飛び出して、走った。
向かう場所は決まっている。
そういえば最近は一緒に帰っていないな、なんて考えると、なおさらうずうずしてくるあたしがいた。
やっぱり、虎太郎はすごい。一緒にいるときだけじゃなくて、いないときでも、虎太郎のことを考えてるだけであたしを楽しい気持ちにしてくれる。
走って走って、あたしはすぐに虎太郎の通う中学の校門にたどり着いた。
以前中まで迎えに行ったこともあったけれど、虎太郎に恥ずかしいからやめてって頼まれて、それからはしていない。
あれは何がだめだったのかしら？
「うーん……あっ！」
少しだけ悩んで、やめた。
校舎から出てくる虎太郎の姿を見て、そんなことどうでもよくなっ

た。
家に帰って、いや、帰り道でだって、どんな楽しいことをするか考えるほうが重要だ。
「こたろ……う？」
時が止まった。あたしは動けなくなった。
あたしの知らない女の子が虎太郎の隣に立って、笑顔を向けていた。同じ制服を着ているから、きっと虎太郎の同級生だ。
自分でも気づかないうちに、あたしは頬をぷくっと膨らませていた。
虎太郎に友達ができるのはいいことで、嬉しいことで、あたしも歓迎しなきゃいけないことなのに。
理解できないモヤモヤした感情を抱えたまま、あたしは会いに来たはずの虎太郎に背を向けて駆け出した。
こんなあたしらしくない気持ちになるのは実は初めてじゃない。
虎太郎が黒服さんになろうと一生懸命努力し始めた時期から、たまにこういう気持ちになるときがある。必死に頑張る虎太郎の後ろ姿を一番近くで見てきたくせに、最低だ。
なんでかしら……。
考えても考えてもわからない。でも、つらい。
全力で駆けたあたしはいつの間にか家についていて、晴れない気持ちを抱えたまま一人きりで部屋にこもった。
＊＊＊
なんでだ、と僕は自身に問いかける。
学校が終わって、校門でこころを待っていたら代わりに黒服さんが来て、「こころ様は先に帰られたからお前もさっさと帰って会いに行け」ってキレ気味に言われた。正直全く意味が分からない。
おいて行かれたのは僕で、僕が文句を言うならまだわかるけれど、逆に僕が怒られる理由はないはずだ。
「おーい、こころー」
とはいえ黒服さんにたてつくわけにはいかないので、おとなしく家に帰った僕はコンコンとこころの部屋のドアをノックする。

そういえば昔ノックなしで部屋に入って着替えを見ちゃったことがあった。あのときは一日口を聞いてくれなかったな、なんて思い出しながらしばらく待ってみたけれど……返事がない。
いったん出直すかと思って振り返ると、黒服さんが立っていた。
え？　さっきまでいなかったよね？　とか聞こうものなら刺されるくらいの殺気を纏って。
もちろん僕は見なかったことにしてもう一度ドアの方を向く。今日の黒服さんはすごく強引だ。
「こころさんやー」
出てきてくれないと僕が刺されちゃうんですけどー！
静かに呼びかける最中に、心の中のもう一人の僕が大声で叫ぶ。リアルに叫んじゃうと背中が危ないから注意だ。
数秒待っていると、がちゃりと音がして、返事のないままドアが開いた。
中にはもちろんこころ一人で、ドアを開けてくれたこころは当然僕のすぐそばに立っているってことになる。
だから、こころの異変にはすぐに気づけた。
いつものこころはこんな風に顔も見えないくらい俯いて、暗くなるような子じゃない。
ちらっと後ろを確認して、空気の読める黒服さんはいつの間にかいなくなっていたから、僕は部屋の中に入った。
「どうしたの？」
部屋の真ん中にこころを座らせて、僕も向かいに座る。
こんな状態のこころを見るのは初めての経験じゃない。
家の外で落ち込んだりはしないから僕や黒服さん以外は知らないはずだけれど、こころにだってこんな日はある。
「何かつらいことでもあった？」
問いかけても、答えは返ってこない。
いつだってそう。他の人が悲しい顔をしたときはすぐに笑顔に変えようとするくせに、自分のこととなると抱え込む。
ほんと、自分勝手。

「おーい」
つんつんとぷにぷにのほっぺをつついてみたり、さらさらの髪を撫でてみたりしても無反応。いつもなら、真っ赤になって怒るくせに。
だからこそ、笑顔にしてやりたくなる。僕は少し負けず嫌いだから、弱ってるこころにだって負けてあげるつもりはない。
「言いたくないなら言わなくてもいいよ。こころがつらい思いをしなくなるまで付きまとうから。なんたってこころは僕の一番大事な女の子だからね」
言い切ったら、こころにすごい勢いで背中を押されて部屋を追い出された。いきなり前言撤回である。
＊＊＊
夕飯時になって、ケロッとした顔でこころは僕の前に現れた。
あまりにいつも通り過ぎる笑顔だから、さっきの下を向いてたあの人はこころとは別人だったんじゃないかって疑惑が僕の中で生まれた。
こっちは心配で心配で、ずっとうろうろしてるっていうのに……。
「こころ、さっきの――」
「虎太郎、あたし今からやりたいことがあるの！」
露骨。あまりに露骨な話のそらし方。
こいつめと思わなくもないけれど、久しぶりに見るこころの笑顔一つで許せてしまう僕はきっとちょろいんだろうな。
「……なにするの？」
「あたし、バンドでぼーかる？　をするから歌を練習したいの！　虎太郎と一緒に歌ったら、楽しく練習できると思うわ！」
「……なるほど」
うん。いつも通りだ。
「ところで、バンドのメンバー集めの方はどうなってるの？」
「明日は演劇部に行くわ！」
「……なるほど」
……なるほど？

五　こころは手錠を使うようです

金曜日の放課後というものは、いつもより少し心が軽くなる。
土日は学校が休みというのもあるし、僕にとってはこころと一緒にいられる時間が増える二日間でもある。
こころは昨日言っていた通り演劇部に向かったらしく、僕も僕で用があるので今日こころに会うのはもう少し我慢ということになりそうだ。
それにしても、何故演劇部なんだろう……。
昨日はあれから二人で楽しく歌って、結局そのことについては触れられなかったから、僕の知る情報は他にない。
演劇部の人をスカウトでもするのだろうか？　ううむ、やはりこころの思考を完璧に理解するのは難易度が高いな。
悩みながらも、僕はスタスタと歩を進める。
目的地は初めて行く場所だ。でも、それなりに名が知れていて、入ったことはなくとも通りがかったことがあるので迷いはしない。
迷う、といえば花音さんは方向音痴って言ってたけれど、どの程度なんだろうか。さすがに行ったことがある場所くらいは迷わず行けるのかな？
新しく加わったメンバーについて思案していた僕は、『ＣｉＲＣＬＥ』と書かれた看板がかかった建物の前で立ち止まる。
ここはこの辺りで活動するバンドが練習したりライブを行ったりする、いわゆるライブハウスというやつだ。
こころたちがバンドを結成して、ちゃんと演奏できるようになれば利用することになる場所で、今日はその視察。
メンバー集めの方はどうしてもこころに任せっきりになっちゃうし、手伝うと言った手前僕だけ何もしないわけにはいかないから。
気が早すぎるかもしれないしバンドが上手くいかない可能性だってあるけれど、こころなら大丈夫だと思う。善は急げ、だ。
それにしても、ライブハウスなんて初めて来るな。
挨拶して、ちらっと中を見て回って帰ろうと思っていたけれど、

ちょっと緊張する。
「入らないの？」
戸惑っていると、後ろから声をかけられた。振り返ると、立っていたのは二人の女の子。
僕が少し強い口調で言われてとまどっていると、さっきの声の主とは違う方から声を掛けられる。
「すいませーん、うちの蘭がツンツンしちゃってー」
ゆったりと話したのは白髪の女の子。
もう一人の、赤メッシュを入れた女の子は蘭という名前らしい。
「ツンツンしてない」
「してたじゃーん」
「してない」
「してたくせにー」
もはや僕を置いてけぼりにして会話を続けるこの二人もバンドを組んでいるんだろうか。
気になるけれど、二人だけの世界が形成されているせいで入り込めない。
仲いいな。
「蘭はデレたらかわいいからゆるしてあげてねー」
「デレないし可愛くもないから」
邪魔をしないように息を殺して二人の仲睦まじい姿を眺めていた僕にようやく視線が戻る。
友人にいじられ続けた蘭さんは顔を赤くしていて、僕は噴き出すのを必死でこらえた。
きっと面白い子なんだろう。
「二人はバンドをしているんですか？」
白髪の子のおかげで少しだけ打ち解けた感のある蘭さんに聞いてみた。
「そうだけど、アンタも？」
やっぱり、まだ言葉に棘がある気がする……。
嫌われてるのかな？

「蘭のこれはいつも通りだからー」
「……何の話？」
僕の気持ちを察してか、白髪の女の子が補足してくれて、僕は内心で「なるほど」と呟く。
当の蘭さんは訝しげに首をかしげていたけれど、おかげで僕はまた会話を続ける。
「僕はバンドのサポートをする予定です。まだ結成もしてないですけど、今のうちに色々知っておこうかと」
「そうなんだ。それならあの人が詳しく教えてくれるよ」
そう言って蘭さんは受付のお姉さんを指さす。
愛想は悪くても良い人なんだってわかって僕は笑った。白髪の女の子が何故かどや顔をしているのが見えてまた笑った。二人は本当に仲がいい。
それからすぐに二人とは別れて、受付のお姉さんと話をした。
やっぱり、すべてのバンドが上手くいくとは限らないみたいだ……
それでも、こころだったらって信じたい。
そういえば、さっき話した白髪の女の子の名前、聞いてなかったな。
それに、あの二人の所属するバンド名も。
でも、なんとなくいつかまた会えそうな気がした。
「お」
スマホが震える。こころからの連絡だ。また一人メンバーが増えたらしい。
僕は急いで家に帰ることにした。
＊＊＊
「……それで、なんでこころは手錠なんか持ってるのさ」
家に帰ると、玄関で迎えてくれたこころは何故か手錠を持っていた。
左手に掲げてドヤ顔をする姿はとても可愛いけれど、同時に何故か悪寒がする。
「薫にもらったわ！　演劇で使った小道具らしいわ！」
「……なるほど」

薫さんって誰、なんて野暮なことは聞かない。「薫は薫よ！」って言われることは目に見えている。僕は同じ轍を二度は踏まないのだ。
演劇部に行くって言ってたし、きっと新しく加わったバンドのメンバーが薫さんなんだろう。そして、その薫さんに手錠をもらったと。
「そんなのもらってなにに使うのさ」
「そ、それは……」
純粋に気になって聞いたつもりだったが、こころは言葉に詰まる。
心なしか顔も赤くなっている気がするし、後ろめたい理由でもあるのかもしれない。
「この前虎太郎が他の女の子と仲良く喋ってたって話をしたら、そういうときはこれを使えって言って薫がくれたわ」
少し間を開けて、ようやくこころが話を続けたかと思えば、今度は声が小さすぎて聞き取れない。
いつもは大きすぎるくらいなのに……珍しい。
「聞こえなかったんだけど……もう一回言ってくれない？」
「薫がくれたわ！」
「いやそのま――」
「――薫がくれたわ！」
「……なるほど」
もう一度は言ってくれないみたいだ。
諦めて家の中に入っていくと、こころも後ろからついてきた。
じゃらじゃらと鎖が物騒な音を立てているけれど、気にせず僕はテレビをつけた。
映ったのは歌番組で、出演していたのはカラフルな髪と衣装が印象的なアイドル。
アイドルバンドなんて今時珍しい。
「……可愛いな」
この青い髪の子、こころみたいに見ているこっちまで元気にしてくれる笑顔だな、なんて思って呟くと、かちゃりと音がして両手の自由を奪われた。
振り向くと、気配を殺して後ろに立っていたこころの瞳はハイライ

トを失っていた。

――ついていたはずのテレビは、いつの間にか消えていた。

六　こころは裁判をするようです

「というわけで裁判よ！」
「……どういうわけさ」
つっこみも空しく、こころに逮捕され、連行された僕は裁判所っぽく机や椅子が並べられた部屋の被告人席に座らされた。
いつの間にこんな部屋をつくったんだろう……どうせ黒服さんたちの仕業だろうけれど。
「花音！　薫！」
裁判長の席に立つこころが呼びかけると、僕の背後のドアががちゃりと開いて呼ばれた二人が入室する。
一人はこの前会った花音さん。もう一人は紫色の髪の、背の高くて顔も整った女優みたいな人。こちらが薫さんだろう。初対面だけど、随分絵になる人だと思う。
花音さんが僕の右、弁護人側に立ち、薫さんは僕の左の検察官側に立った。つまり、花音さんは僕の味方だ。
「花音さん……ありがとうございます」
「うん……がんばろうね、虎太郎君」
表情を崩した僕に花音さんが微笑みかける。
もしかして、花音さんって天使？
感極まりそうになる僕を戒めるように、ごんと大きな音が鳴った。
「静粛にしなさい、虎太郎」
右手に木槌を持ってそう言ったこころの金眼はまたもハイライトを失っていた。
こころってそういうキャラだっけ、なんて聞こうものなら手に持った木槌で打たれそうな威圧感に、僕は背筋を伸ばす。
世界を笑顔に、じゃなかったっけ……？
そんな言葉を脳裏に浮かべた僕の顔は真っ青である。
「か、かのんさん……」
助けを求めて見てみた花音さんも、こころの迫力にふぇぇと震えてしまっている。

だめだこりゃ……。
「君が虎太郎君だね？　君は自分が犯した罪をわかっているのかい？」
役者顔負けの演技でそう問うたのは薫さん。真に迫った、本物の検察官だって言われても違和感がないような演技は、僕も思わず罪を告白してしまいそうになるはほどだ。
実際何もしていないから、何も言うことはないんだけれど。
「答える気がないようだね……本当は自分の口で言って欲しかったが、仕方ない。私が言うしかないようだ」
悲しげに、憐れむような眼で僕を見ながら薫さんは続ける。
「君はこころという姫がいながら、別の子を手篭めにしようとした……あの日のことを語るこころの表情は儚いという言葉以外で表現しようがないものだったよ」
「僕はこころ一筋だぞっ！」
「ツッコむところ、そこ？」
声を荒げた僕に対して、首をかしげる花音さん。
確かに、儚いってなんだ、とか言いたいことは色々あるけれど、それよりも僕にはどうしても許容できないことがあった。
僕がこころ以外の子に手を出すなんて太陽が西から登ったってありえない。
「嘘はいけないよ虎太朗君。その日の君の行動はこころだけじゃなく、黒服の人たちからも証言をもらっているからね。」
「ぐぬぬ」
本来味方であるはずの黒服さんたちによるまさかの裏切りに僕は唸る。
完璧に冤罪であるはずなのに、僕にはそれを覆す手段がない。こういうときに頼れる黒服さんたちまで薫さん側についたとすれば、頼みの綱は花音さんだけだ。
僕がちらりと目配せすると、花音さんは頷いてくれた。
いける。まだ戦える。
「虎太朗君は、そんなことする人じゃないと思うな」

花音さんの力強い声に僕も首を縦に振って賛同の意を示す。
どうだと言わんばかりに薫さんに視線を送った僕を襲ったのは、ぞくりとするような寒気。肌が泡立つ、あの感じ。
言うまでもない。薫さんにはまだ策がある。
「花音なら、許せるのかい？好きな人が他の女の子に尻尾を振っている姿を見てしまっても……」
儚いという言葉以外で表情できない演技に、僕は涙を流しそうになる。が、耐えた。
だってやってないんだもん。
「そんなの……許せるわけない」
花音さんはダメだったみたいだ。
涙腺をやられたらしい花音さんは両手で顔を覆って、声を震わせてそう言った。
「そんな……」
濡れ衣を着せられることが確定した僕はその場に崩れ落ちる。
涙なんて出るわけがない。僕は悪いことなんてなにもしていないのだから。
「最後に、何か言い残すことはあるかい？」
薫さんの目は、罪を犯してしまった僕を哀れむようだった。
「それでも僕は、こころ一筋なんだ……」
静まり返った法廷に僕の声が虚しく響いた。
「結論が出たようだね……どうするんだい、こころ。いや、裁判長」
薫さんがこころを呼んだとき、僕は思った。そういえばさっきからこころが静かだな、と。まあ、こころが介入せずとも僕の負けは確定だし関係ないことといえばそうなんだけれど、こころが静かにしてるなんて珍しい。こういうとき一番楽しんでそうなのに。
「虎太朗、あなたは……」
勢いよく裁判長席から立ち上がったこころは顔が真っ赤で目もぐるぐる回ってて……いったいなにがあったんだろう。
うーむと悩む僕の前で、こころは力なく木槌を振り下ろす。
「無罪！」

「え？」
「負けたよ虎太朗君。敗北の味……儚い」
「え？」
「虎太朗君、次はもうこんなことしちゃダメだよ？」
「え……え？」
戸惑う僕をよそに、薫さんと花音さんは法廷を去っていった。
切り替えはやすぎでしょ……。なにしに来たんだあの人たち……。
＊＊＊
嵐のような裁判が終わって、その夜僕はテレビを見ていた。夕方見るはずだった、カラフルなアイドルが出てきた歌番組の続き。有能な黒服さんたちが録画しておいてくれたらしい。
「こころはアイドルになってみたいって思わないの？」
「世界を笑顔にするアイドル……それもいいわね！」
「だよね」
ソファに座って、隣のこころと笑い合う。
手錠をもって、なんてこともなく、至って平和な鑑賞会だ。
問題があるとすれば、こころとの距離がものすごく近い気がすることくらい。いい匂いがして理性が吹っ飛びそうだからやめて欲しい。
「虎太郎はどの子が好きなのかしら？」
何故か心配そうな顔をしたこころがすごく可愛く見えて、僕は思わず笑ってしまう。
「水色の髪の子かなぁ……こころみたいに笑うんだよね」
「そ、そう……あたしみたいに……」
「うんうん」
僕は笑って頷く。
「あたしみたいな子が好き……」って壊れた機械みたいに繰り返し呟くこころは見なかったことにした。
「と、ところで虎太郎、裁判で言っていたことに嘘はないわよね？」
「もちろんだよ」
正直、色々ありすぎてどの言葉のことだかよくわからなかったけれど、

「そうなのね！　それならいいわ！」
こころが楽しそうに笑ってくれたから、それでいいやって思った。
僕は一生、こころにはかなわないんだろうな。